

竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（二）

—— 1 桐壺香（6 末摘花香） ——

矢野環
岩坪健
福田智子

本稿は、矢野環・岩坪健・福田智子「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介」（『社会科学』第43巻第3号、二〇一三年一月）に引き続き、竹幽文庫蔵『源氏千種香』所載の組香について、翻刻と考察をおこなうものである。前稿では、武居雅子氏「『源氏千種香』の依拠本を探る」（『総研大文化科学研究』9、二〇一三年三月）に採り上げられた簪木香・玉鬘香・梅枝香・若菜下香を紹介したが、今後は、『源氏物語』五十四帖の組香を、桐壺香から順に考察していく。なお、前稿で採り上げた四つの組香については、原則として、本稿から新たに追加した組香の構造式のみを示す。資料に関わる基本的な説明は、前稿を参照されたい。また、凡例は、前稿と重複する部分についても便宜上再掲する。

凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、以下の方針によって校訂する。

- 1、漢字・仮名ともに通行の字体を用いる。
- 2、仮名遣い・反復記号・送り仮名は、底本のままとする。
- 3、濁点は、底本に記載されているもののみ記す。
- 4、適宜、句読点を施す。
- 5、朱書きは、「朱」と示す。
- 6、一面の終わりには「」を付し、さらに丁数を丸括弧を付けて記す。

一、考察には、（1）竹幽本組香の方法、（2）『源氏物語』との関わり、というふたつの観点を設ける。（1）には、御家流宗家三条西公正氏により考案された構造式（香の複雑な組み合わせを表記した数式。詳しくは附録「構造式について」参照。）を記した上で、その手順を説明する。なお、解説を要する香

道用語には「*」を付し、「香道用語解説」として、本稿の末尾に一括して五十音順に列挙する。

一、巻末には影印を付す。前稿に掲載した体裁とは異なり、本稿から、綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したものに丁数を付して示す。

1 桐壺香

【翻刻】

△桐壺香

いとさなき初もとゆひに長さよを

契る心はむすびこめつや

一 名乗紙にて聞くべし。

一 幼^{イトキ}なきの香、初元^ウゆひの香、心もふかきの香、こき紫の香、

各二包都合八包の内、七包出香とし、皆焚終て包紙を開く

べし。」「(四オ)

一 心もふかき、こき紫の香、外に拵へ試に出す。幼なきと初

元結の香は、客香故に試なし。

一 客香四包打交、其内一包除け、地香四包加て、都合七包と

し、一炷充焚出すべし。

一 地香四炷は聞捨にして、同香の客を源氏と名附け、一炷客を葵上と名附、何炷目に出たると此三炷斗を書附出すべし。

名乗紙、認様左のごとし。」「(四ウ)

二五 源氏	名乗
三 葵上	

如此認て出すべし。

一 記録点は、両客香斗認る。源氏、葵上、三炷共には二点充、都合六点也。源氏二炷中は、初一点、後二点、都合三点かくる。源氏、葵上、一炷充の中は、皆一点充たるべし。皆中は褒美に朱にて引入^{ヒキイレノヲト}大臣と下に認る也。

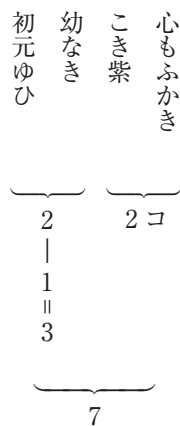
認様左のごとし。」「(五オ)

桐壺香之記 初元ゆひ除(朱)

〔表〕 (五ウ)

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



桐壺香では、香元^{*}が、まず試香^{*}として二種類の香を炷き、二度香炉を回す。それから本香^{*}が七度、出香^{*}される。

本香は、「幼なき」「初元ゆひ」「心もふかき」「こき紫」各二

包、合計八包が準備される。このうち、客香は「幼なき」「初元ゆひ」、地香は「心もふかき」「こき紫」である。客香各二包、計四包から無作為に一包を除き、地香四包を加えた七包を用いる。試香のある地香二種類四炷を手掛かりに、残り三炷を二炷と一炷に聞き分ける。

答え方は、まず、地香四炷は閑捨にする。残り三炷の客香のうち、同じ香二炷を「源氏」、一炷の香を「葵上」と称し、何炷目の香であったかとともに、名乗紙に記す。

「香之記」には、正解と各人の答案が記される。桐壺香の場合、客香の答案のみ記す。三炷全部を聞き当てた時は、各二点で合計六点。「源氏」二炷は、初めの香は一点、後の香は二点、合計三点。「源氏」「葵上」のいずれか一炷を当てた時は各一点となる。全部聞き当てると朱で「引入大臣」と記す。

蘭之園本には、桐壺香は記載されていない。

（2）『源氏物語』との関わり

竹幽本は各巻の冒頭に和歌一首を挙げている。これは巻名歌と呼ばれ、登場人物が詠んだ和歌、または口ずさんだ古歌の中から、原則として巻の名前を詠み入れた歌が選ばれている。ただし、桐壺の巻には「桐壺」を詠み込んだ和歌はなく、その場合は当巻で詠まれた歌の中から、巻を代表する名歌が採られている。この巻名歌は、いつ誰が編纂したかは不明であるが、遅

くとも室町時代後期には成立したと考えられ、江戸時代になると『源氏物語』の絵に添えられたりして世間に流布した。

桐壺の巻名歌は、十二歳になった光源氏が元服した際、父の帝が引入大臣に贈ったものであり、大臣の娘である葵上との縁組をほのめかしている。「引入」とは冠の中に髪を引き入れることで、元服する人に冠をかぶせる役を意味し、光源氏の場合は左大臣が務めた。

巻名歌に対して左大臣が返した和歌は、

結びつる心も深きもとゆひに濃きむらさきの色しあせずは
 （四七頁^①）

であり、第二句の「心も深き」と第四句の「濃きむらさき」は、竹幽本の香の名称に転用されている。

この左大臣の返歌は『源氏小鏡』では一部の伝本にしか見られないが、「こき紫」（または「こ紫」）ならば連歌で用いる寄合^②として、『源氏小鏡』の多くの伝本に採られている。それに対して「心も深き」は寄合ではなく、『源氏小鏡』でこの和歌を用いるのは第三系統第二類と第六系統のみである^③。前稿^④において、竹幽本で『源氏小鏡』が利用されたのならば、それは第二系統であると考察したが、その結論はこの桐壺香に当てはまら

軒端萩 間違
空蟬 同前

空蟬の場へ空蟬と認て点なし。

軒端萩は勿論認に不及。

源氏と小君は聞中たるに一点充也。

軒端萩を空蟬と間違たるは星一つ附るべし。

一 記録草稿左のごとし。」(二〇ウ)

〔表〕(二一オ)

右のごとく草稿にて点定め、其後、一界縮め六界とし、香本は出香の通り七界にて記録清書する也。

一 聞の下に褒美として空蟬香聞たるは単ヒトの衣キヌと認る。軒端萩

香聞たるは、木隠コカクレと認る。皆中はうつ蟬の哥一首認る也。皆

朱にて認てよし。記録大概左に顕す。」(二二ウ)

空蟬香之記

〔表〕(二二オ)

〔一〕竹幽本組香の方法

源氏	3	}	7	古渡香を用いる
小君	2			
空蟬	1	}	7	新渡香を用いる
軒端萩	1			

空蟬香では、本香として、「源氏香」二包、「小君香」三包、「空蟬香」一包、「軒端萩香」一包の合計七包が、出香される。^{*}試香がないため、各一包の「空蟬香」と「軒端萩香」とが聞き分けられないことになるが、「空蟬香」には「古渡」(古く外国から渡ってきた品。とくに室町時代またはそれ以前に渡来した品。高級で珍重される。)、 「軒端萩香」には「新渡」(近しむたりい時期に輸入された品。とくに江戸時代に入って輸入された品。の)の香木を用いることにより区別する。

答えには、十*炷香札を用いる。「源氏」二*炷には順に「花一」「花二」、「小君」三炷には順に「月一」「月二」「月三」、「空蟬」には「ウ」、 「軒端萩」には「花三」と「ウ」を同時に打つ。すべて出香し終わった後、折居七つを順に回し、札を打つ。^{*}

空蟬香の場合、「香之記」を記す前に記録の草稿を書く。草稿には、札を見ながら、まず「源氏」「小君」の答案のみを書き入れ、「空蟬」「軒端萩」は空白のままにしておく。その上で、包紙を開いて正答を記し、答案と照らし合わせる。「軒端萩」を開き当てると四点。記録草稿には「空蟬」と答えた場所に「軒端萩」と記す。この場合「空蟬」は、聞き当てても、聞き当てられなくても記さない。また、「軒端萩」を聞き当て、「空蟬」を聞き当てた場合は二点。「空蟬」の場所にそのまま「空蟬」と記し、「軒端萩」には何も記さない。そして、「軒端萩」「空蟬」と

もに聞き違えた場合は、もちろん得点はない。「空蟬」と答えた場所にそのまま「空蟬」と記し、「軒端萩」には何も記さないのは先に同じである。なお、「源氏」「小君」は、聞き当てれば各一点。「軒端萩」を「空蟬」と聞き違えた時は、星一つを付す。こうして作成した草稿を、香元はそのまま清書する。

一方、草稿のように「空蟬」「軒端萩」の記録をまとめて一箇所に記すと、七炷の出香を六段の表に示すことができる。上から順に一段ずつ詰めて六段にし、最下段に朱書きで、「軒端萩」を聞き当てた者には「木隠」、全部聞き当てた者には空蟬の歌一首を記す。

蘭之園本では、空蟬方、西君（軒端萩）方に分かれた盤物^{*}になっている。碁盤や碁笥などの小道具を使い、香を十包用いた一炷開きである。竹幽本とは全く異なる方法である。

(2) 『源氏物語』との関わり

一巻名歌は、源氏が空蟬を三度目に訪れても会えなかったとき、空蟬に送ったものである。その歌が書かれた手紙の端に、空蟬は次の和歌をしたためた。

空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびにぬる袖かな
(一三一頁)

第三句の「木がくれて」が、記録の名目「木隠」に使われている。また別の名目「単の衣」は、逃げた空蟬が残したものである。

竹幽本の香の名称には「軒端萩」とあり、それは空蟬の継娘の呼称と思われるが、『源氏物語』では「軒端萩」、蘭之園本では「西君」とされる。竹幽本は「萩」と「萩」とを見誤ったか。あるいは依拠した『源氏物語』の梗概書の類があったか。

さて、この空蟬親子は仲が良く、一緒に囲碁を打っているところを源氏が垣間見て、若い娘より継母の方が上品だと評価している。それを受けて竹幽本も「古渡の香木」は空蟬、「新渡の香木」は軒端萩に当てたのであろう。『源氏物語』梅枝の巻でも、昔の方が優れていると書かれている。

大式の奉れる香ども御覧するに、なほいにしへには劣りてやあらむと思して(四〇三頁)

尚古思想の現れである。

4 夕顔香

【翻刻】

△夕顔香

よりにこそそれかとも見めたそかれに

ほのくみつる花のゆふがほ

一 試なし。

一 十炷香の札を用ゆ。

一 一二三ウの香、各二包充、都合八包の内、七包出香とし、皆

焚終て包紙を開くべし。」(二三ウ)

一 出香八包打交、二包除遣、残六包を一炷間に焚出し終て除

置たる二包の内、一包取て焚出す。是を専らに聞くべし

残一包は、不用。

一 出香六包は無試十炷香の通り、一より順を立て、間に随ひ

札をうつを、記録に記して後に、除たる一包聞て、六炷の

内何炷目と同香なるを、聞の通り名乗紙に書出す。

認様名目左のごとし。

一 炷目と同は さく花」(二三オ)

二 炷目と同は 小家がち

三 炷目と同は そらめ

四 炷目と同は あれたる宿 如此認出すべし

五 炷目と同は 露の光

六 炷目と同は 何かしの院

出香に無は しら露

一 記録点は、本香六炷の内は、客地香の差別なく、独聞三点、

二人二点、三人より一点充、末一包の独聞五点、二人四点、

(二三ウ) 三人より三点充也。聞たる褒美に朱にて左のごとく

認るべし。

皆中は

哥一首を書

末一包と地香の内を聞たるは

上の句を書

末一包斗り聞たるは

下の句を書

地香斗り聞たるは

聞数を書

皆外は

眠と書

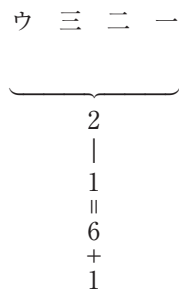
記録認様大概末に記す。」(二四オ)

夕顔香之記 ウ除(朱)

〔表〕(二四ウ)

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



夕顔香は、前段と後段に分かれる。前段では十炷香札、後段では名乗紙で答える。まず、前段では、「一」「二」「三」「ウ」の四種類の香、各二包、合計八包から二包を除く。試香がないため、一炷目には「一」を打ち、異なる香が出るたびに「二」

「三」「ウ」と打っていく。そして後段では、前段で除いた二包から一包を無作為に選び、六炷のうち何炷目と同じ香であるかを名乗紙で答える。名乗紙には、一炷目から順に、「さく花」「小屋がち」「そらめ」「あれたる宿」「露の光」「何かしの院」、そして、出香にない場合は「しら露」と「聞きの名目」で答えを記す。

得点は、前段では、客香・地香の区別なく「独り聞き」三点、二人では二点、三人からは一点ずつ、後段の「独り聞き」は五点、二人では四点、三人からは三点ずつ与える。「香之記」には、全部聞き当てた者には和歌一首、前段の地香と後段を聞き当てた者には上句、後段のみ聞き当てた者には下句、前段の地香のみ聞き当てた者には得点、全部聞き違えた者には「眠」と朱書する。

蘭之園本は、「一」「二」の香、各三包（試香あり）と、「源氏」を別香で三包（試香なし）準備し、「一」「二」の香に「源氏」一包を交ぜ、三包一組を三つ作り、「源氏」が何炷目に出たかを答えるというもの。九通りの答えが想定されるが、三炷のうち二炷目に出た場合は、いずれも「聞きの名目」は「夕がほ」であるため、答えは七通りとなる。従って、「聞きの名目」の数は、竹幽本と同じであるが、竹幽本にない「たそかれ時」「夕がほ」が存する一方、竹幽本にある「さく花」「しら露」が指定さ

れていない。竹幽本よりも簡便で、方法も異なっている。

(2) 『源氏物語』との関わり

七つの名目のうち、二炷目から六炷目までは蘭之園本にも見られ、いずれも『源氏小鏡』に引かれている連歌の寄合である。以下、一炷目から順に典拠を示す。

① 「さく花」は源氏が六条御息所の邸宅で、女房に詠みかけた和歌の初句による。

咲く花にうつるてふ名はつつめども折らで過ぎうさけさの

朝顔（一四八頁）

② 「小家がち」は、夕顔が住んでいた家の辺りを「いと小家がち」（一三六頁）と描写している。

③ 「そらめ」は、夕顔が源氏に返した和歌の結句による。

光ありと見し夕顔の上露はたそかれ時のそらめなりけり

（一六二頁）

④ 「あれたる宿」を、尾崎左永子氏・薫遊舎校注、増補改訂版『香道蘭之園』⁵⁾は「夕顔の住む家」と解釈するが、物語では夕顔の家を荒れたと描いた箇所は見当たらない。蘭之園本が利

用したと武居雅子氏が論じられた『源氏小鏡』（第一系統）を見ると、

十六日一日は、かのなにかしのぬんのあれたるに、おきふしかたらいて、くらしたまふ。そのことは。

しの、め。しりめ。露のひかり。おなしくるま。あれたるやと。みくさにうつもる、いけ。（下略）（傍線、筆者）

とあり、「荒れたる宿」とは「何がしの院」すなわち源氏が夕顔を連れ出した廃院を指すと考えられる。その建物は物語でも、「荒れたる門」（一五九頁）「いといたく荒れて人目もなく」（一六一頁）「荒れたる所」（二六六頁）と書かれている。⑤「露の光」は、廃院で源氏が夕顔に語ったセリフ「露の光やかに」（一六一頁）による。

⑥「何かしの院」は、④「あれたる宿」で述べたとおり、源氏が夕顔と滞在した廃院で、物語にも「なにがしの院」（一五九頁）とある。

⑦「しら露」は、夕顔が初めて源氏に送った和歌の第三句による。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

（一四〇頁）

この歌に源氏が返したのが巻名歌である。

右記の七語のうち、蘭之園本に見られないのは①「さく花」と⑦「しら露」である。①で挙げた「咲く花に」の和歌が詠まれた場面は夕顔が登場しないため、梗概書ではよく省略され、『源氏小鏡』で「咲く花に」詠を引用するのは一本（第六系統）しかない。また、⑦に引いた「白露」を含む詠歌は、『源氏小鏡』では一部の伝本（第一系統第二類、第三系統第二・三類、第五系統、第六系統）にのみ見られる。前稿では竹幽本に『源氏小鏡』が用いられたのならば、それは第二系統であると推論した。しかしながら桐壺香の項目で述べたのと同様に、この夕顔香でも系統が一致しない。桐壺香では『源氏物語』でなければ、和歌を全首収めた『源氏大鏡』が利用されたかと推察した。「さく花」も「しら露」も『源氏小鏡』では寄合にも挙げていないので、『源氏大鏡』の類から選ばれたのであろう。

竹幽本の夕顔香では、すべて聞き外れた場合、記録の名目に「眠」と書かれる。廃院で皆が眠ってしまったため、夕顔は物の怪に取りつかれ死んでしまったが、その場面との関連であろう。

5 若紫香

【翻刻】

△若紫香

手につみていつしかもみむ紫の

ねにかよひける野辺の若艸

一 十炷香の札を用。

一 北山の香二包、松の鬨トゴの香三包、田鶴の声の香三包、若草

の香二包客なり、紫上の香一包是も客なり、都合十一包の内、地香二包
除け、残九包能打交て、出香とし、皆二五ウ 焚終て包紙
を開くべし。

一 地香三種外に拵へ、試に出す。両客香は試なし。

一 札打様左のごとし。

北山に 二の札各一枚用 松のとほそに 三の札三枚用

田鶴声に ウの札三枚用 両客に 花二花二の札此内一枚

両客は無試十炷香の例に札をうつ。初に出たる二五ウは
定て花一をうつ。若草は同香結ひたるを中りとす。紫上は
一炷を中りとす。

一 記録点星左の如し。

○ (朱) 紫上の香、独聞四点。二人より三点充。聞違何人

にても星一つ充附るべし外の香を紫上の香と聞たるは星なし

○ (朱) 地香、独聞二点、二人より一点充也。聞違、星な

し。

○ (朱) 若草の香、紫上の香より前に出たる時、二六オ 独

聞五点、二人聞四点、三人聞三点、四人より二点

充也。聞違何人にても星二つ充附るべし若草の香を外の香と聞違たるも、外

の香を若草の香と聞違たるも同然

○ (朱) 若草の香、紫上の香より後に出たる時、何人聞に

ても、一点充。聞違、星もなし。

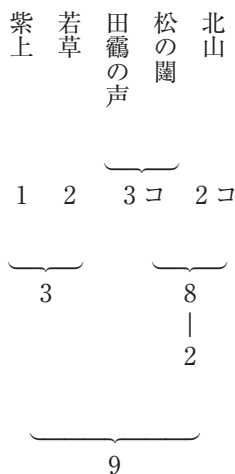
一 記録認様左の通也。二六ウ

若紫香之記 北山除 松除 (朱)

〔表〕二七オ

【考察】

(1) 竹籾本組香の方法



若紫香は、地香「北山」二包、「松の鬨」「田鶴の声」各三包
と、客香「若草」二包、「紫上」一包、計一二包を準備し、地香
から二包除き、残り九包を出香とする。*これに先立ち、地香「北
山」「松の鬨」「田鶴の声」の試香をおこなう。客香には試香は
ないが、全九炷のうち、地香ではない香は三炷あり、そのうち
二炷は同香であるので、同香を「若草」、残り一炷を「紫上」と

聞き分ける。

答えには十炷香札を用い、「北山」二炷は順に「一」「二」、「松の鬮」は「三」「花三」「月三」、「田鶴の声」は「ウ」「花ウ」「月ウ」と打つ*。また、二種類の客香には、出香の順にまず「花一」と打ち、同香は「花二」、異なる客香ならば順に「月一」「月二」と打つが、客香は三炷なので、札は一枚余ることになる。

「紫上」の「独り聞き」*は四点、二人からは三点ずつ。「紫上」を聞き違えた場合は、星一つを付すが、他の香を「紫上」と答えた場合は、星を付けない。また、地香の「独り聞き」は二人からは一点ずつ与える。なお、「若草」が「紫上」よりも先に出た時は、「独り聞き」*五点、二人では四点、三人では三点、四人からは二点ずつ与え、「若草」を他の香と聞き違えたり、他の香を「若草」と聞き違えたりした時は、いずれの場合も星を二つつつ付ける。逆に、「若草」が「紫上」よりも後に出た時は、一点ずつ与え、聞き違えても星は付さない。

蘭之園本は、地香「北山」「松の声」「聖」を各三包作り、別途試香を行う。客香は「若草」二包で、計十一包を炷く。記録には、「若草」の初めの一包を「紫上」、また、最後の一包を「田鶴の一声」と記す。「聞きの名目」*に、竹幽本にない「聖」を指定している点*が注意される。

（2）『源氏物語』との関わり

香の名称として挙げられている「北山」「松の鬮」（松の戸の意）「田鶴の声」「若草」「紫上」を用いて、当巻のあらすじを記すと以下のようなようになる。

光源氏は病を治すため、「北山」（一九九頁）に住む聖に会いに出かける。その地で僧都が修行に励む「松の鬮」（二二二頁）の家で、「若草」（二〇八頁等）のような「紫上」を見出す。彼女の声は幼い「田鶴の声」（二三八頁）のようであった。

「紫上」のみ当巻（第五卷）には見当たらない。というのは彼女が紫の上と呼ばれるのは、螢の巻（第二十五卷）からである。「上」とは正妻を意味するので、まだ結婚していない女性を紫の上とは呼べない。しかしながら『源氏小鏡』でも、若紫の巻で既に「紫上」と呼称しているので、それに倣ったのであろう。

右記の五語のうち、蘭之園本でも香の名称に用いられているのは「北山」と「若草」であり、「紫上」と「田鶴の声」は記録の名目に見られる。ただし蘭之園本は「田鶴の一声」で、この方が物語に合う。

「松の鬮」は聖が詠んだ和歌によるが、『源氏小鏡』には見当たらない。しかしながら「松の鬮」は寄合として有名で、寄合を収めた系統（第一〜四系統）の伝本には必ず採られている。一方、『源氏大鏡』には当巻で詠まれた二十五首の和歌が収められ

ている。その中から「松の鬮」を選んだと見なすよりも、寄合の中から採用した可能性の方が高いかと思われる。

6 未摘花香

【翻刻】

△未摘花香

なつかしき色ともなしになに、この

すゑつむはなを袖にふれけむ

一 光源氏方、頭中将方と左右に分りて聞也光源氏方上座なるべし。

一 諸友の香三包、大内山の香三包、未摘花の香三包、十六夜の香三包、都合十二包出香とし、皆焚終て包紙を開くべし。

一 諸友の香、大内山の香、外に拵へ試に出す。」(二七ウ)

一 十六夜の香、源氏方斗試に出す。未摘花の香、中将方斗試に出す十六夜は源氏方の客也。未摘花は中将方の客也。

一 源氏方にては十六夜の香、三包の内、初に出たる十六夜には十六夜の札を打。跡の二包には、大内山の札を打也。又大内山三包の内、二包には十六夜の札を打べし。終に出たる大内山の香に大内山の札を打也。

一 中将方には未摘花三包の内、初に出たる一包に未摘の札(二八オ)を打。残二包には大内山の札を打也。又大内山の三包の内二包には未摘の札を打。終一炷に大内山の札を打也。

但、諸友の香は双方共に同名の札を打べし。

一 一点は、源氏方、十六夜の始の一炷中は三点、残二炷は二点充也。もし残の二炷に十六夜の札打たるは、星二つ也別箇の差。

一 中将方、未摘花の始の一炷中、三点、残二炷は二点充也。若、

残二炷に未摘の札を打は、星二つ別箇の差。」(二八ウ)

一 地香、他の客香、各一点充也。点星消合て認べし。

一 札は人前十二枚十人分百二十枚也。

札表

十炷香の銘と等し。

札裏

諸友 三枚 大内山 三枚 十六夜 三枚 未摘花 三枚

一 記録様左のごとし。」(二九オ)

未摘花香記

〔表〕(二九ウ)

【考察】

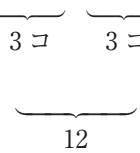
(1) 竹幽本組香の方法

諸友 3コ

大内山 3コ

未摘花

十六夜



中将方のみ試

源氏方のみ試

光源氏方と頭中将方、左右に分けておこなう。もちろん、光

源氏方が上座である。香は、地香^{*}「諸友」「大内山」と客香^{*}「末摘花」「十六夜」、三包ずつ計十二包を出香とする。本香^{*}に先立ち、地香は試香をおこなう。また客香は、光源氏方には「十六夜」のみ、頭中将方には「末摘花」のみを試香とする。つまり、光源氏方は、「諸友」「大内山」「十六夜」、頭中将方は「諸友」「大内山」「末摘花」の試香をおこなうことになる。

答えには、一人分十二枚の札を用いる。表は十炷香札と同じであるが、裏は「諸友」「大内山」「十六夜」「末摘花」の札を三枚ずつ準備する。

さて、答え方は、光源氏方と頭中将方とで異なる。光源氏方は、光源氏方のみ試香のあった「十六夜」三包のうち、最初には「十六夜」の札を打つ^{*}が、残り二包には「大内山」を打つ。また、「大内山」三包のうち、最初と二包目は「十六夜」の札を、最後の札のみ「大内山」を打つ。一方、頭中将方は、頭中将方のみ試香のあった「末摘花」三包のうち、最初には「末摘花」の札を打つが、残り二包には「大内山」を打つ。また、「大内山」三包のうち、最初と二包目は「末摘花」の札を、最後の札のみ「大内山」を打つ。なお、「諸友」は、光源氏方、頭中将方ともに、同じ名の札を打てばよい。

得点について、光源氏方は、「十六夜」の一炷目は三点、残り二炷は二点ずつ与えるが、残り二炷に誤って「十六夜」の札を

打ってしまった場合は、星を二つ付す^{*}。また、頭中将方は、「末摘花」の一炷目は三点、残り二炷は二点ずつ与えるが、残り二炷に誤って「末摘花」の札を打ってしまった場合は、星を二つ付す。地香と他の客香を聞き当てた場合は、各一点。点数と星の数（星一つにつき一点引く）を合計して得点とする。試香のある客香について、同香でも何炷目であるかによって札の打ち方が異なるため、正答が出しにくくなるという複雑さがある。

蘭之園本は、竹幽本とほぼ同様の内容をもつ。ただし、光源氏方の方に「末摘花」、頭中将方の方に「十六夜」の客香の試香があるという点で、竹幽本とは全く逆になっている。それでも、札の打ち方は竹幽本と同じであるので、蘭之園本は、光源氏方、頭中将方、いずれも、二種類の客香のうち、試香のない方を聞き当てるか否かが、大きく勝敗を左右するように設定されている。この点においては、蘭之園本の方が、竹幽本よりも難度が高いと言えるか。

（2）『源氏物語』との関わり

竹幽本では香の名称は「諸友」「大内山」「末摘花」「十六夜」の順であるのに、札裏の順序は「末摘花」と「十六夜」が逆になっている。これは蘭之園本が、「諸友 大内山 ^{末摘花}十六夜」の順に列挙していることに拠るか。この四語のうち「末摘花」だけ巻名歌にあり、これは源氏が末摘花との出会いを後悔して詠んだ

歌である。ほかの三語は次の和歌による。

もろともに大内山は出でつれど入る方見せぬいさよひの月

(二七二頁)

これは源氏の友人である頭中将が源氏に詠みかけた歌で、源氏が末摘花を訪れたことを隠していた、と恨んだ和歌である。

注

- (1) 本文は『新編日本古典文学全集』(小学館)により、そのページ数を末尾の()内に付けた。
- (2) 寄合とは、ある語に対して縁のある語を指す。たとえば源氏の元服に関して縁のある語として、『源氏小鏡』は「初もとゆひ」や「こきむらさき」などを挙げている。
- (3) 『源氏小鏡』の系統分類は伊井春樹氏『源氏物語』注釈史の研究(桜楓社、一九八〇年)により、その本文は岩坪健『源氏小鏡』諸本集成(和泉書院、二〇〇五年)による。
- (4) 矢野環・岩坪健・福田智子「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介」(『社会科学』第43巻第3号、二〇一三年一月)。
- (5) 淡交社、二〇一三年五月。
- (6) 武居雅子氏『源氏千種香』の依拠本を探る」(『総研大文化科学研究』9、二〇一三年三月)。
- (7) 二〇八頁のほか、二一六・二二七・二三九頁にもある。

香道用語解説

一炷開き(いつちゅうびらき) 香を炷く度にすぐ答え合わせをすること。

ウ(う) 十炷香札の裏などに記される、「客」の字のウ冠を表記したものの。客香を指す。

打つ(うつ) 答えの札を出すこと。

折居(おりすえ) 答えの札を入れるために紙を畳んで作った器。金や銀で裝飾されたものが多い。

聞捨(ききすて) 香を聞いても答えないこと。

聞きの名目(ききのみようもく) 組香の主題や出典に拠って、答えに指定されたことば。

客香(きやくこう) 組香では普通、試香のない香。一般に、客香は地香よりも高級な香を用いる。

香之記(こうのき) 香席の記録。表題は、「桐壺香之記」といったように奇数文字で記す慣習がある。

香元(こうもと) 香席で香を炷く人。「香本」の文字を用いることもあった。ただし、「本香」の意味で「香本」と書く例もある。

試香(こころみこう) 本番前の香席。本番の香席に出される香をあらかじめ聞いて香を覚えておく。「試み」とも。

地香(じこう) 組香では普通、試香のある香。一般に、地香よりも客香の方に高級な香を用いる。試香のない組香の場合は、客

香と指定された香以外を指す。

十炷香札(じちゅうこうふだ) 十二枚一組の札。表には花形文が記され、これにより誰の札であるかを区別する。裏は、「一」「二」「三」「花一」「花二」「花三」「月一」「月二」「月三」と記

した札が各一枚と、「ウ」が三枚ある。

出香(しゅつこう) 香席の本香の段において、香元から香炉を回すこと。特に志野流においては、最初の本香を回す時に、香元が「出香」と宣言し、連衆はそれを言い継ぐ。

炷(ちゆう) 香を炷く回数を数えるのに用いる接尾辞。本来の説みは「しゅ」である。

同香(どうこう) 同じ香。

名乗紙(なのりがみ) 答案を記す紙。「手記録紙」ともいう。御家流の呼称。志野流では「記紙」(きがみ)という。

盤物(ばんもの) 組香の方法のひとつ。香を聞き当てることに、盤

上で人形や小道具を移動させて、盤上の勝負を競う。

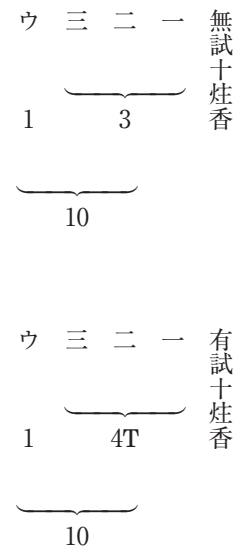
独り聞き(ひとりぎき) 一人だけ香を聞き当てること。

星(ほし) 香を聞き当てられなかった時に、香席の記録に記す記号。

本香(ほんこう) 名を伏せて炷く香木。連衆はこれを聞いて答えを出す。

附録 構造式について

組香の構造式は、御家流宗家三条西公正氏によって、実践女子大学における講義のために発案された。組香の準備にあたり、用意すべき香の種類と包みの数、そして、実際の焚き方を簡明に表示するものである。たとえば、典型的な無試十炷香と有試十炷香の場合は、次のような構造式となる(元々は横書き)。

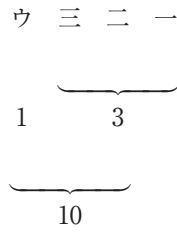


無試十炷香は、「二」「二」「三」の香を3包ずつ、「ウ」の香を1包用意し、それらを合わせた10包を本香で炷くことを意味している。すなわち、香の種類を表す「一」「二」「三」を統べる括弧の下の数字「3」は、各々の香包の数を表し、また、その「3」と「ウ」香の「1」を統べる括弧の下の数字「10」は、本香で炷く香の総数を示す。そして、有試十炷香の場合は、これに「試香」を意味する「T」(Trialの略)を加え、「4T」「二」「二」「三」の香を4包ずつ用意する意」と表記する。もちろん、そのうち各1包は試香である。

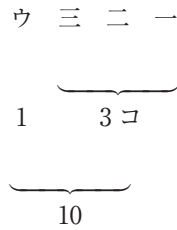
この記法では、試香の有無が数字「3」と「4T」に表れるため、右の例においても、本香の構成は両者同じであるにもかかわらず、一見それがわかりにくい。実際、試香の1包を加算した数字を示すこの記法に対し、組香伝書では、香包準備の指示が、「一二三各三包。別に一包試に出す」といったように、試香を別に記すことが多いのである。そこで本稿では、まず、試

香を含めない数字を示し、試香のある場合には「コ」と記すことにした（「丁」の代替文字は、当然「試」も考え得るが、御家流のある流派ですでに使用された例があるため、使用を避けたい）。これで、本香の構成と試香の有無が一目瞭然である。

無試十炷香



有試十炷香



矢野（第一著者）はかつて、杉本文太郎氏『増補改訂 香道』（雄山閣、一九八四年一月）の校閲にあたり、すべての組香の構造式を記載したことがある。その際、特殊な記法を必要とするいくつかの組香について、当時の御宗家、三条西実謙氏のご了解のもと、新しい記法を追加した。本稿においては、そのような組香はないが、今後、本書を紹介していく際に、記法に工夫が必要になった場合には、逐一説明を加えることとする。

附記

本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝

文学の伝承と受容に関する研究」（同志社大学人文科学研究所第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号253330403、いずれも平成25〜27年度）における研究の一部である。

(六丁表) 八丁表 簪木香 前稿参照。

空癖香

う川癖乃身並くけり本礼も小
 ねりへぐく乃ふ川へくぬりぬ

一試ふ

一十癖香の礼と目也

一源氏香二色小若香之色空癖香一色軒湯萩香

一色初合七色出香 皆替紙 色紙と関

(八丁裏)

一 空癖 萩湯萩の香と二種も試ふ紙あり

一 空癖 古液乃香本と目也軒湯萩の古液
 乃香本と色く出紙

一 札亦極

源氏小 花二札 小若小 月二札

空癖小 川流札 萩湯萩小 花二札二枚

出香関紙と掛若七つ咽と云く也一札と目也

一 龍源と空癖と軒湯萩と入替と紙と目也

龍源よりと川札と龍源小目付一札と目也

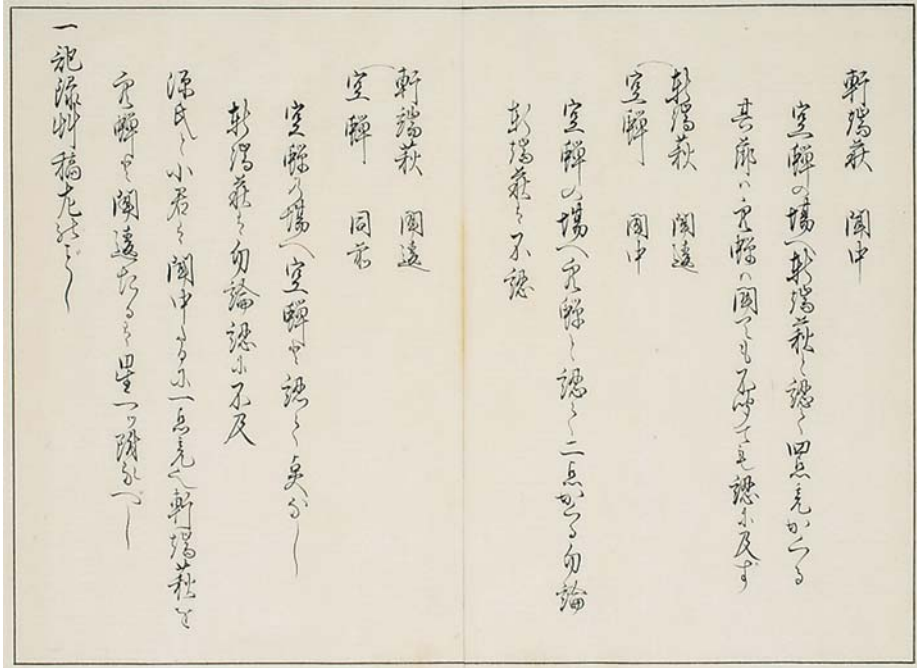
軒湯萩の場と酒と目也其外半と札流し通

龍源と色紙と目也本香と不流紙と目也

右流と龍源

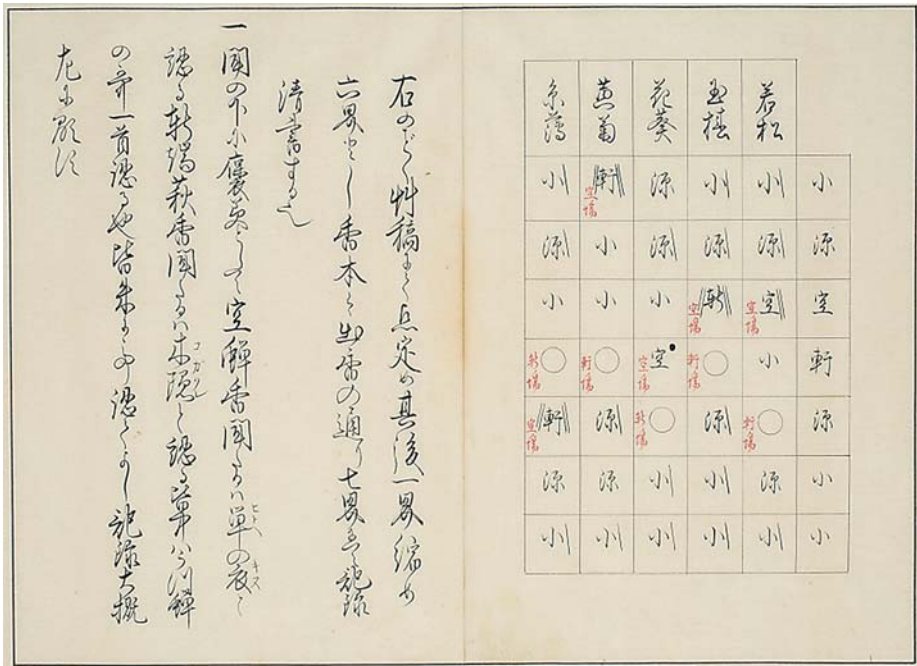
(九丁表)

(九丁裏)



(十丁裏)

(十丁表)



(十一丁裏)

(十一丁表)

糸落	菖蒲	花奏	玉揺	若和	
川	小	源	小	小	小
源	小	源	源	源	源
小	小	小	軒	空	空
軒	軒	空	軒	小	軒
源	源	源	源	源	源
小	小	小	小	小	小

空 禪 香 籠

	木	若松	玉桂	花菱	茉莉	名木	名木
一	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
二	深氏	深氏	深氏	深氏	深氏	深氏	深氏
三	空禪	空禪	空禪	空禪	空禪	空禪	空禪
四	新香	新香	新香	新香	新香	新香	新香
五	深氏	深氏	深氏	深氏	深氏	深氏	深氏
六	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
七	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
八	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
九	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
十	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
十一	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
十二	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
十三	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
十四	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
十五	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
十六	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
十七	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
十八	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
十九	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君
二十	小君	小君	小君	小君	小君	小君	小君

夕 顔 香

花の~~~~~つる花の中かほ

一 試み

一 十枚香の札と目由

一 二二ウの香名二色先切合八色は筒七色出香

留持紙で色紙で圍く

(十二丁裏)

(十二丁表)

一 出香八色先交二色陸落後二色と二枚圍小楳出紙で陸落と二色の筒一色を横置紙を巻く小圍十枚色

一 出香二色を空試十枚香の通り一より順と立て圍小楳八札と二枚龍珠小籠して後陸落二色圍く二枚の内付枚目と同香を二枚の通り名木紙小書出紙綴箱名目九枚

一 一枚目と同く 二色

二 一枚目と同く 小袋

三 一枚目と同く そろ

四 一枚目と同く 小袋

五 一枚目と同く 小袋

六 一枚目と同く 小袋

七 一枚目と同く 小袋

八 一枚目と同く 小袋

九 一枚目と同く 小袋

十 一枚目と同く 小袋

十一 一枚目と同く 小袋

十二 一枚目と同く 小袋

十三 一枚目と同く 小袋

十四 一枚目と同く 小袋

十五 一枚目と同く 小袋

十六 一枚目と同く 小袋

十七 一枚目と同く 小袋

十八 一枚目と同く 小袋

十九 一枚目と同く 小袋

二十 一枚目と同く 小袋

一 龍珠と二枚香二枚の内を空地香の庄別かく楳圍と点二人一点二人と点末二色の楳と点二人四点

(十三丁裏)

(十三丁表)

